

「全力ハイブリッド」で次のステージへ
「対話の灯を」点火しましょう！

山本知恵 (日本 YWCA 総幹事)

2022 年の Y M C A / Y W C A 合同祈禱週礼拝のテーマは IGNITE (灯をともし) でした。そして、「出会う！つながる！ともに社会を変える！」をテーマに開催した「Y W C A フェスタ 2022」では、まさにコロナ禍での今後の活動に点火する新しい対話の始まりが生まれたのではないのでしょうか。

Y W C A 運動は、どの時代もどの社会においても、人 (他者) や社会との関わりにおいて、「出会い・学び・行動する」自分自身の生き様を問われる経験の場であり、この経験の場 (居場所) を共に創り、プレゼントしあう営みだといえるでしょう。

世界 Y W C A が現在推奨している RiseUp (若い女性のリーダーシップトレーニングプログラム) もこの原則に基づいています。若い女性たちが、自分が置かれた社会環境の中で、自分の権利を知り、他者との協働の中で学びを深め、仲間と共に変革への行動を起こすことを促すプロセスです。これは限られた個人の能力をスーパーなものに高めるのではなく、Y W C A ならではの多世代間協働によるシェアするリーダーシップとして推奨されています。

対面とオンラインのハイブリッドで開催されたフェスタでは、まさにこの RiseUp プログラムについて、参加者全員で共有する時間から始まり、その後の分科会では、いま私たちの社会、とりわけ子ども・若者・女性が直面する社会状況における課題や取り組みと出会い、学び、これからの行動に向けての協働のためのつながりやヒントを得られたのではないのでしょうか。

世界 Y W C A のビジョン 2035 のもと、世界中で若い女性のリーダーシップを育むセーフスペースプログラムが実践されています。長いコロナ禍は全世代のあらゆる人々に心身のダメージを与えました。人や社会との間に距離を置き、関わりを減らして迷惑をかけない、そんな生活規範が暗黙の力で押し寄せた結果、感情・ことば・居場所が奪われていった

ような気がします。

YWCAは、これまでもそうであったように、子ども・若者たちに、YWCAを通して、新しい人と出会い、課題と向き合い、他者と協働する経験をプレゼントしていくことが求められています。そのためには何が必要なのでしょうか。

RiseUpでも自分と向き合い、権利や権利侵害について学び、エンパワーされる現場の取り組みとして、セーフスペースプログラムが紹介されています。まったく新しいプログラムではありません。それは、いままで当たり前のように思われ、最近はおろそかにされてきたかもしれない、「対話」の実践です。

「対話」の実践は、簡単なようで難しいです。誰かが何か「正解」を教えるのではなく、指導したり、正したりするのでもなく、目の前にいる人の存在を感じ受け止め「共にいる」ことから始まります。うれしいこと、悲しいこと、わからないこと、不思議に思うこと、気持ちや考えを否定されることなく表現すること。小さなやり取りを生む共有の体験の場。そこでは一緒に食べること、何かを観ること、ニュースを聞くことがあると対話が進むのではないのでしょうか。似ている人と安心してやりとりできる「対話」も重要ですし、異なる他者との対話を通して、知らなかった自分、新しい自分と出会っていくのも小さな「対話」の積み重ねのだいご味といえるでしょう。

「対話」の場面設定、コミュニケーションの仕方は多様になりました。1対1の対話も、グループの作り方も、情報の受け取り方、発信の仕方も多様なツールの使いこなし方も得手不得手もあります。

すでにYWCAネットワークの中でつながっている全国の仲間との「対話」を積み上げていくと同時に、社会の中に対話の実践の場となるセーフスペースプログラムを展開し、若い女性のエンパワメントを実現するYWCAのミッションに立ち返りつつ、次のステージへと共に進みましょう。